
私の成長記録

瑞雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の成長記録

【Nコード】

N9787R

【作者名】

瑞雨

【あらすじ】

目が覚めたら真っ暗闇の中にいた。ここはどこ？なんにも分からないけどとりあえずくるくる回ってる。頭はどっち？気づいたら赤ちゃんになってた私。とりあえず平凡に生きてる私の17歳までの成長記録。

1 6 か月〜0 歳 6 カ月

< - 6 ヶ月 >

真っ暗闇。

目を閉じてるのか、開いているのかさえ分からない。

男の人の声と女の人の声がする。

私に話しかけてるのだろうか。

まるで赤ちゃんに話しかけてるみたい。

ここはどこだろう。

< - 2 ヶ月 >

ゆらゆら、ゆらゆら揺れている。

水の中にいるみたい。

相変わらずここには光がない。

くるくる、くるくる回ってる。

一回転して元どおり。

頭はどっちだろう。

< 0 歳 >

ふわふわ、ふわふわ、揺れてる。

誰かに抱っこされてるみたいだ。

手や足がうまく動かない。

どうしてだろう。

優しい女の人の声が私を呼ぶ。

「凜ちゃん」

凜ちゃんとは誰のことだろう。

<0歳6ヶ月>

言葉が話せない。

何かを話そうとすると泣き声になる。

私はあまり『話』をしなくなった。

私を抱く女の人のおっぱいを口に含むのはまだ慣れない。
けれども小さな体では抵抗できない。

「凜ちゃん、いっぱい飲んで早く大きくなってね」

「ふ、ふえーん（ぎゃー！）、」

ご飯は母乳。

16か月～0歳6カ月（後書き）

こんな感じで17歳まで6か月単位で記録していきます。
よければ最後までお付き合い下さいませ。

1歳〜2歳6ヶ月

<1歳>

まだまだ言葉は話せない。

ご飯は好きなものを食べれないし、なによりトイレが苦痛。
どうして私はおしめをしているのだろう。

どうして私はここにいるのだろう。

どうして私は『赤ちゃん』なのだろう。

<1歳6ヶ月>

少し大きくなった。

ぷくぷくとした小さな手で物を掴める。
でもまだうまくコントロールできない。
なぜだろう。

<2歳>

歩けるようになった。

階段ものぼれる。

でも頭が重くてたまに倒れてしまう。

痛い。

足が短いので階段はまだ降りられない。

「危ないから登ったらだめよ、凜ちゃん」
「あい」

どうやら『凜ちゃん』とは私のことらしい。

<2歳6ヶ月>

私に弟ができた。

真っ黒の毛、真っ黒の目。

ぜんぶ、ぜんぶ、まっくろ。

かわいい。

「にゃんこー!」

3歳〜4歳6カ月

<3歳>

自分でご飯が食べられるようになった。

お箸がうまく使えない。

本を読んだ。

優しいタッチで描かれた可愛い絵本。

全部ひらがなで書かれた十ページ程の絵本。

「凜ちゃん、絵本読んでるの？」

私を『凜ちゃん』と呼ぶ優しい女の人の手作りだ。

どうやらこの女性は私の『お母さん』らしい。

<3歳6ヶ月>

『お母さん』はたくさん絵本を私にくれた。
でも簡単すぎてつまらない。

今度『お父さん』の書斎に行ってみようか。
あそこにはたくさん本がある。

（流石にファンタジーはないか…）

<4歳>

『お母さん』の目を盗んで『お父さん』の本を読む。
文字がいつぱい。

毎日少しずつ。

今読んでるのは『車輪の下』。

「ふああああ」

もうすぐお昼寝の時間。

明日も読もう。

< 4歳6ヶ月 >

『お父さん』の本を読んでいるのが『お母さん』に見つかった。

「凜ちゃんご本読んでるの？」

「おとおさんの、」

「あらあら」

『お母さん』は笑った。

子供はこんな本は読まないし、読めない。

『お母さん』は私が本当に読んでいるとは思っていないみたい。

だから背伸びをしてる子供を見てみたい優しい顔で私を見る。

でも私は『お父さん』の本が読める。

だって私は『子供』じゃないから。

5歳〜6歳6カ月

<5歳>

保育園に行く。

たくさんの『子供』がいる。

私も『子供』だ。

けれど私は……

「お歌の時間ですよー」

「はい!!」

今日の歌はなんだろう。

<5歳6ヶ月>

保育園には『子供』がたくさんいる。

みんな私を『子供』だと思って話しかける。

『お父さん』も『お母さん』も『先生』も『子供たち』も。
でも私は子供じゃない。

見た目は子供。

でも中身は……。

「凜ちゃんはとってもいい子ね」

そうだよ。あたりまえじゃない。
だって、

私は『子供』じゃない。

< 6 歳 >

小学校に行く。

まるでランドセルに背負われてるみたい。
赤いピカピカのランドセルは少し重たい。

「ハンカチは持った？」

「うん」

国語と算数と体育と図工と生活と道德。
その繰り返し。

あーあ、つまんない。

< 6 歳 6 ヶ月 >

りっちゃんと喧嘩した。

喧嘩と言ってもりっちゃんが一方的に怒ってるだけ。
でも私が謝らないと。

だって私は『子供』じゃないから。

「ごめんね、」

『子供』じゃなくて、ごめん。

7歳〜8歳6カ月

<7歳>

小学校は暇だ。

勉強はとても簡単で、授業は眠い。

テストはぜんぶ簡単。

勉強しなくたって5分で解けちゃう。

でも百点はとらない。

わざと間違えるのも大変だ。

「凜ちゃんいつも90点だね！」

これくらいの『お遊び』くらい許容範囲でしょ？

<7歳6ヶ月>

私は我が儘を言わない。

泣かないし、怒らない。

だって『子供』じゃないから。

でも『お父さん』と『お母さん』が心配するから、たまに泣くし、怒ってみせる。

今日は我が儘を言ってみた。

「あれ、ほしい」

『お母さん』はにこにこしながら買ってくれた。
我が儘失敗。

< 8 歳 >

熱が出た。

『お母さん』は心配そうな顔で私を見る。
大丈夫だよ。

だって私は『子供』じゃないから。
目が覚めたらベッドに一人。

「かあ、さん」

ちょっぴり寂しい。

< 8 歳 6 ヶ月 >

『お母さん』はとっても美人。
でも本当のお母さんじゃない。

『お父さん』はとってもかっこいい。
でも本当のお父さんじゃない。

私の父さんと母さんはどこに行ったのだろう。

「『お父さん』、お帰りなさい」
「ただいま」

『お父さん』はにっこり笑う。

父さんとは違う笑顔で。

9歳〜10歳6カ月

<9歳>

私は『お父さん』の難しい本が読めるし、お料理もできる。

（今は『お母さん』のお手伝い程度しかさせてもらえないけれど、確かに私は料理ができるのだ）

掃除や洗濯だってできるし、宿題だって促されずに自分でできる。クラスメイトは『子供』ばかりで、どうしても子守りをしているような気になるけれど、なかなかうまく付き合っている。

だって私は『子供』じゃないんだもの。

「凜ちゃんってまるで大人みたい。」

子供らしい、ってなんだろ。

<9歳6ヶ月>

りっちゃんは勉強が苦手。

でもそれは『今の私』と比べたらの話で、ほんととはとっても賢い。運動もできる。

りっちゃんに勉強を教えてあげた。

「りんちゃん、ありがとう」
「うん」

小学生って、大変。

<10歳>

クラスメイトのはなちゃんが恋をした。
相手はたつくん。
はなちゃんはおっとりとしてとても可愛い。

「凜ちゃんだけに教えてあげるね」

私とはなちゃん2人だけの内緒の話。

<10歳6ヶ月>

クラスメイトの女の子はみんな好きな人がいるらしい。
好きな人がいるのが『当たり前』

「凜ちゃんは誰が好き？」
「う、ん……」

へらり、と笑う。

私に好きな人なんていない。

『同級生』を好きになることなんてない。
絶対に。

だって私は…

恋をしてはいけない。

ううん、できないのだから。

10歳と11歳の間

いやはや、いったいぜんたい、なかなかどうしてこんなことになったのか。まったくもって身に覚えがないのだ。

生前（死んだ覚えはないけれど）の私は17歳の女子高生で、特に目立つわけでも地味なわけでもなく、ただ平々凡々な日々を送っていたはず。

なのに気づけば見知らぬ『お母さん』のお腹の中にいて、気づけばなんの弊害もなく無事生まれ、気づけば普通に小学生をしているのだ。なにゆえこんな事態に陥ってしまったのだろうか。

17歳の私はもちろん17歳の時の記憶があるわけで、つまりは、新しい身体の中で着々と精神年齢を上乗せし続けている。結果、身体は10歳なのに、精神年齢は27歳なわけだから、中身は立派（？）に大人の女性。

そんな私が世間から見れば普通の少女に見せるには多大なる努力が必要なのだ。もちろん、小学生の勉強なんて授業を聞くまでもなく簡単に解けてしまう。だけでもそれじゃあ私の平凡な人生を送るという目標が叶えられない。山あり谷ありの人生なんて真つ平ごめんだ。それに私のはいわばルール違反なわけで、それで天才少女なんて世間を賑わす気もさらさらない。

（天才少女という人生を全く考えなかったわけじゃないけれど、そうなった場合、天才なんてポジションはせいぜい小学高学年くらいまでしかもたないので、その安易な考えはすぐに棄てた。）

なぜなら１７歳だった私はいたって平凡なのだから。

そんなわけで、私は第２の人生を送っているわけだが、これがなかなか楽しい。

勿論、私の同級生の彼らとは年齢が全くもって違うので、話が合うかと言われれば、答えはノーなのだが。

これにおいては、某眼鏡の探偵さんは凄いと感心してしまう。彼もまた私と同じ状況なわけだが（少し違うけれど）、なかなかうまく周りに馴染めている……はず。だが思えば、彼の仲間の少年少女もまた小学１年生らしくはないのだ。彼らに合わせている少年が凄いのか、彼と友人付き合いができる少年少女が凄いのか、恐らく両方なのだろうけれど。

精神年齢２７歳の私は１０歳のクラスメイト達に『大人』な対応をしているので、なかなか周りの評判は良いだろう。まあ子供らしくないと言われたらお仕舞いだけど。

そんな私は美人な『お母さん』とハンサムな『お父さん』から生まれたので、自分でもなかなか可愛らしい見た目をしていると思う。将来有望な美少女だ。だが、生前の私の両親は全くもって普通だったので、そんな２人の子供であった生前の私も勿論普通だった。そ

れが気づけば周りも羨む美少女になっているわけだから世の中何が起こるか分からないものである。私自身鏡を見る度にはっとしてしまふのだから周りもつと心落ち着かないだろう。

（この容姿のせいで私の望む本来の『平凡』な人生は少し横路を逸れてしまったけれど）

そんな私がなによりも悩むのは、今の両親を呼ぶ時に躊躇してしまふことだ。

なぜなら私にはきちんと父さんと母さんがいたのだから、いつの間にか私の両親になつていた彼らを呼ぶのが躊躇われるのは仕方のないことだと思ふのだ。精神年齢だけで言えば、ほんの数歳しか違わない彼らを『お父さん』『お母さん』と呼ぶのはやはり何か気まずい。

それに、思ふのだけれど、私はこの美少女の身体の中に入り込んでしまった言わば異分子なのではないだろうか。もともとこの美少女として生まれる予定だった魂を押し退けて、何の間違いか私がこの少女の身体を乗つとる形になつてしまったのではないかと思ふのだ。

そう思うと、この身体を持ち主の両親を私が『お父さん』『お母さん』と呼ぶのは申し訳なく思ってしまう。

だけれども、仮にこの身体に私の魂が入り込んだとしても、私は申し訳ないと思いつつもどうにもできないし、生きていくほか仕方が

ないので、美少女としての人生を謳歌しているわけだ。

だって身体を返せと言われてもどうしたら返せるのかなんて分からないし、ならば私が17歳だった私に戻るまでは今の『私』の株をあげるのが 私の役目なんじゃないかと思う。と言っても本当にこの身体が別の誰かのだっていう証拠もなければ、私が元に戻る保証もないのだからそんなことは杞憂にしかすぎないのだけれど。

まあそんなわけで見た目は子供、頭脳は大人！ってやつを絶賛体験中な私なのです。おわり。

11歳〜12歳6カ月

<11歳>

りっちゃんと帰る。

りっちゃんは優しい。

「凜ちゃんあそぼー」

りっちゃんはお隣さん。

<11歳6ヶ月>

最上級生になったクラスメイト達は大人ぶった態度で学校内を歩く。
でも私からしたらみんなまだ子供。

「ふふ、」

「凜ちゃんどうしたの？」

「ううん、」

おませなよっちゃん。

<12歳>

算数の宿題。

「凜ちゃん、このバツはなに？」

しまった。

エックスは使えない。

小学生って不便。

<12歳6ヶ月>

もうすぐ卒業。

6年間は長い。

みんな少し大人になった。

でもまだまだ子供。

「凜ちゃんは何の部活に入る？」

「茶道部、かな」

目立つのはご法度。

13歳〜14歳6カ月

<13歳>

中学生。

セーラー服を着るのはちょっぴり抵抗。
なんだかコスプレみたい。

クラス写真は教頭先生の後ろ。

「あ、」

後光がさしたみたいに光ってる。
私の顔はしかめっ面。

教頭先生は要注意。

<13歳6ヶ月>

英語を習う。

中学生って楽ちん。

このレベルならまだまだイケる。

国語も数学も簡単。

でも理科は苦手。

社会は好きだけど暗記は嫌い。

でもまだ大丈夫。

だって中学生レベルだから。

<14歳>

りっちゃんはテニス部。

前みたいに一緒に遊ぶことはなくなった。
でも朝は一緒に学校に行ってる。

「凜もテニスすればいいのに。」

上手なのに勿体ないって笑うりっちゃん。

だからだよ。

だから中学でテニスはやらない。

<14歳6ヶ月>

色んな人に出会える。

色んな知識に出逢える。

年下のクラスメイトとは仲はいいけれど、
そんな時一番の癒しになる場所。
同じ空間にいるのに、一人の世界。

「凜ちゃん、ほんとに本が好きだねー」

図書館。

15歳〜16歳6か月

<15歳>

受験生！

また受験なんてちよっぴりうんざり。

でも私がするのは受験勉強じゃなくて、高校の勉強の『復習』。

「凜ちゃんと同じ高校に行きたいなあ」

「そうだね、」

あと少し。

<15歳6ヶ月>

今の私には中学生の勉強なんて簡単。

でも、私は決して目立って良い点をとってはいけない。

なぜなら『17歳だった私』と同じレベルの高校に入らなきゃいけないから。

レベルの高い高校になんて入ったら落第しちゃう。

だって私は、『17歳だった私』の頭脳で止まったまんまなのだから。

「あと、2年で」

『私』と同じ17歳。

<16歳>

あと一年で『17歳』。

『17歳だった私』を思い出してみる。

父さんがいて、母さんがいて、家は一軒家。

私は高校二年で、テニス部で、隣の家には、幼なじみが……あれ？

幼なじみなんていたっけ？

<16歳6ヶ月>

毎日の儀式。

『17歳』の私を復習する。

私には父さんがいて、母さんがいて、私は……私の名前は……なまえは、

・・・なまえ？

『私』は誰だっけ？

『17歳の私』が思い出せない。

16歳364日〜17歳5日

<16歳と364日>

明日で17歳。

怖い。

17歳になるのが、怖い。

だって私は『17歳だった私』を忘れてる。
もう、名前すら思い出せない。

『私』が17歳になったらまた胎内からやり直すのだろうか。
17歳だった私はどこにいったのだろうか。
わからない。『わたし』がわからない。
17歳になるのが、

怖い。

<17歳と1日>

りっちゃんに告白された。

小さい時からいつも隣にいたりっちゃん。

でもあたしは、

<17歳と2日>

りっちゃんはいつもどおり。

私はどうしたらいいのだろう。

<17歳と3日>

考える。

毎日毎日りっちゃんのことを考える。

りっちゃんは優しい。

りっちゃんがかっこいい。

りっちゃんは、りっちゃんは・・・、

< 17歳と4日 >

私はどうしたらいいの・・・？

< 17歳と5日 >

転生してから17年。

前世で私が生きてきた年数も17年。
合わせて34年。

りっちゃんは17も年下。

それなのに私は悩んでいる。

どうして？

私はどうしたいの？

< 17歳と6日 >

私は思う。

私の精神年齢は34歳。

だけれども、私は残りの17年を社会で生きてはいない。

保護された人生を繰り返しただけ。

それって、34歳なのではなくて、ただ34年生きてきただけではないのだろうか？

つまり今の私は、見た目と同じ17歳なわけで・・・、
りっちゃんと同じ17歳で、

だから、それは・・・つまり、

16歳と17歳の間

気づけばいつも隣にいたりっちゃん。生まれた時からのお隣さん。

小さいりっちゃんを私は弟を見るような目で接してきた。勿論私も見た目はりっちゃんと同じだったけれど。でも、17歳の記憶がある私からしたら、3歳だった時も、5歳の時も、小学生になった時も中学生になった時も、やっぱりりっちゃんは小さな弟で、私にとっては家族みたいなものだった。

奇妙な体験をしている私にとって、恋愛なんてできるものではなくて、17歳から成長しないままもう一度子供からやり直してる私には、この生活をしている以上、一生恋愛とは無関係な人生を送るんだろう、と思ってた。

私になにより恐れているのは、17歳を越えることだった。

17歳のまま成長が止まり、また17年を過ごして、合計で34年も生きているのに社会のことは全く知らない私が、大人になてなれるのか心配だった。

いつも同級生たちを子供扱いし、自分は大人だと言いつけてきたのに、いざ大人になろうとしている自分が怖くて堪らなかった。私は全然大人なんかじゃなかった。いつまでたっても17歳のまま成長してなくて、周りが成長してるのに気づけなかった。

りっちゃんはいつまでも小さなりっちゃんではなくて、私よりずっとずっと大人になってて、いつの間にか私の方がりっちゃんに甘えて、依存して、りっちゃんには私がついてないと、なんて馬鹿な勘違いをして。

子供なのは私の方だったのに。

いくら34年分の記憶があつたって、私はまだ17歳。それより未来のことなんて、てんで分からない。だから、大人ぶる必要なんてなかった。

りっちゃんが私を好きでいてくれるなら、私は素直にそれを受け止めたらいいんだよね？

りっちゃんは小さな弟なんかじゃなくて、立派に男の子なんだもの！

あ、また子供扱いしてる。

りっちゃんは男の子じゃなくて、男の人になってる。私のお姉さん目線はまだまだ治りそうにもないみたい。でも、まあいいよね。私がりっちゃんを好きなことには変わりないんだもの。それに！ほら、あれみたい。源氏物語！逆光源氏ってね！

りっちゃん！立派なお嫁さんになってね！（あれ？）

17歳7日

<17歳7日>

いつも私の隣で笑ってるりっちゃん。
いつも一緒に遊んだりっちゃん。
いつも私の心配をしてくれたりっちゃん。
いつの間にか大人になってたりっちゃん。
だいすきな、りっちゃん。

『りっちゃん、すき、だよ』

にっこり笑ったりっちゃん。

けたたましい騒音で目を覚ました。原因である目覚ましを右手で止めて、もぞもぞと布団から這い出ると、鳥の鳴き声と、太陽の光を感じ、まるで漫画か小説みたいなお決まりな朝を迎えた。

『ここは……どこだっけ？』

『自分』の部屋なのに、どこか違和感を感じながらも、自然な動きで部屋を後にする。毎日この部屋にいて、毎日この家で生活しているはずなのに、まるで友達の家に来たような、そんな違和感がある。洗面台も台所もリビングや両親の部屋の場所だって知っている。だけれど違和感が拭えないのはなぜなのか。

「凜？どうしたの、ぼーっとしちゃって。」

後ろから声がした。振り替えると、自分を見て不思議そうな顔をした女性が立っている。

誰だっけ？

「凜？早く朝ごはん食べないと学校に遅刻するわよ？」

「うん、分かってる。」

知らないのに、知らないはずなのに、自然と言葉が出て、自然と行動に移している。

「・・・・・・・・」

ただぼーっと動く私を目の前の女性は怪訝な顔をして見ている。そしてまた部屋に戻る私を呆れたように、また愛おしそうな表情で見つめた。私はそれにひどく焦った。

どうして？

どうしてそんなに優しい顔で私を見るの？
だって私はあなたを知らないのに。

ひどくのろのろと階段を登り、ボタンと音を立てて扉が閉まった時、私の頭の中で何かがパチンと弾けた。

……ううん、違う。私は知ってる。このやり取りも、この人も、この家も、この『世界』も。

私は１７歳の女子高生で、名前は凜。

．．．．．凜？私は凜で良かった？それはあの世界の名前ではなかった？でもこの人は私を凜と呼ぶ。この人は、この人は．．．．．私の母さん．．．．．この家は１７年間過ごしてきた私の家．．．。

そうだ。

私は凜だ。

あの世界でもこの世界でも私はいつでも『凜』だった。どうして私は『私』を忘れていたんだろう。どうしてこんなにも私を愛してくれる世界を忘れていたのだろう。

戻ってきた。

胎内からやり直してきたあの１７年間を過ごしたあの世界から私は自分の世界に戻ってきたのだ。美人の『お母さん』もいなければハンサムな『お父さん』もない。私の姿も特別整ってはいなくて、声も、髪も全部本当の『私』のもの。

私の本当の世界では1日だって経っていない。私が17年も別の世界で生きていたことなんてもろともしてなくて、いつもどうり時を刻んでる。

あれは夢？

ううん。夢なんかじゃない。絶対に。夢なんかじゃない。『お母さん』のお腹の中にいたことも、こっちの母さんが恋しくて隠れて泣いたことも、小さな子供に混じって遊んだことも、はなちゃんと内緒の話をしたことも、りっちゃんを好きになったことも、全部ぜんぶ、夢なんかじゃない。

りっちゃん。

大好きなりっちゃん。

好きだって言っただけなのに帰ってきちゃった。

りっちゃんに大好きだよ、って言っただけなのに。

「りっちゃん……」

り、……っちゃん……、好きって、……私、好き、って……りっちゃん

んに、言ってない。

「うえ……、っ！ひつく、っ、」

ぼろぼろと流れる涙は地面に落ちる。小さな染みをつくる床を眺めたまま私は泣いた。しゃくりあげる声だけが部屋の中に響く。私の部屋。でも違う部屋。大好きだったアーティストのCDも、大きな羊のぬいぐるみも、猫のストラップも、母さんや父さんだっているけれど、ここにはりっちゃんがない。りっちゃん、りっちゃん……！

「凜……？」

「……り、っちゃん？」

なんで？どうしてりっちゃんがここにいるの？

「凜？なんで泣いてるの？」

「りっちゃん、りっちゃんりっちゃんりっちゃん!!」

ただひたすら『りっちゃん』と名前をしゃくりあげる私を、りっちゃんは何った顔をしながら見ている。でもどうして?なんで?だってここは違っのに。あの世界と違っのに。

「凜、どうしたの?」

りっちゃんはきれいな形の眉を下げて困ったように笑いながら私の頭を撫でてくれる。

「凜は17歳になっても泣き虫なんだから。僕がいないと駄目だねえ。小さな凜ちゃん」

りっちゃんはくすくすと笑いながら私の髪を掬い上げる。

うん、駄目なの。りっちゃんがないと駄目なんだよ。

「ほら、早く顔を拭いて。学校に遅刻しちゃうよ」

「りっちゃん、なんでいるの？」

「んー？毎日迎えに来てるじゃないか。昨日だって来たでしょ？何言ってるの、凜は。可笑しな凜」

りっちゃんは「物忘れするにはまだ早いよ」と可笑しそうに私の頭をコツンとたたく。

毎日？毎日迎えに行ってたのは私だよ？隣の家には『私』がりっちゃんを迎えに行ってたんだよ？

「ほら、早く着替えて。下で待ってるからね」

りっちゃんが出ていった扉をぼんやりとした眼差しで見つめた。

……そうだ。りっちゃんだ。りっちゃんはいつも私の隣にいたんだ。
幼馴染みの、りっちゃん。

小さい時から一緒に、泣き虫な私を慰めるのはいつもりっちゃんの役目。毎朝迎えに来てくれて、あっちの世界では私が毎朝迎えに行つて、一緒に学校に行つて、あっちの世界では毎日一緒に帰つて。こっちの世界でも向こうの世界でも私たちはいつも一緒だった。体がぴったりとくっついてるのではなくて、心が接着剤をつけられたみたいにぴたつとくっついて、私たちはいつも繋がっていた。離れていても、一緒にいなくなつて私たちは離れてはいなかった。

りっちゃんはいつでも私の隣にいたのに。どうして『私』は忘れてたんだろう。

「りっちゃん……!」

私は部屋を出るりっちゃんを呼び止めた。

「なあに？」

「大好き!!」

りっちゃんはきょとした顔をしたけれど、すぐに、にっこりと笑った。『私』も、私も大好きな優しい、やさしい笑顔。

「うん。僕もだよ」

さあ、学校に行こう!!

本当の私で。

大好きなりっちゃんと一緒に。

父さん、母さん、ただいま。

『お父さん』、『お母さん』、行ってきます。

17歳7日（後書き）

裏話的なことを載せてるので、よかったらあとがきもどつぞ。

あとがき

最後までお読みいただき、大変ありがとうございます。

こんな短い文章の集まりを読んでいただき、あろつことにか『お気に入り』に登録して下さった皆様には、感謝感謝でございます。

この話は2年前くらい？につくつてたものを掲載したものです。

短い文章だけで『トリップした女の子』を書きたいと思ったのがきっかけで、書き始めたものです。

今思えば、トリップではなく転生もの？でもまた元の世界に戻るし・・・、と感じて、あんまりトリップって感じではありませんでしたね・・・^^；

裏設定的な話をする、

主人公は17歳

本名は、晴海凜

りっちゃんは幼馴染で同じく17歳、

本名は光山陸

まあ、あんまり関係ないです、はい。

りっちゃんは、男の子、ってのをどのくらいの方が分かってらっし
やったのか、気になります。
告白した、っていう段階で

「え、りっちゃんって男だったの!？」

って知った方もいらっしやっただろうし、

「え、分かってましたけど？ ばれればじゃーん」

って方もいらっしやっただでしょう。

私的にはりっちゃんが男ってことを隠してて、告白した、って段階
で「男!？」っていう反応を期待していたので、皆さまがどちらの
反応だったのか、気になりますね。

あ、でも

「え、りっちゃんってそんなに重要な役じゃないと思ってた。なん
にも考えてなかったー」

って方もいらっしやるかもですね（笑）

ともかく、こんなにも短い、よく分からない話を最後までお読みい
ただき、誠にありがとうございます。

瑞雨。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9787r/>

私の成長記録

2011年4月28日21時52分発行